「薬学教育学」のスタートアップ ～何をどのように見て、何を明らかにするのか

有田悦子,^{*,a} 石川さと子^bStartup of Pedagogy in Pharmaceutical Education
—What to See, How to Consider and What Is RevealedEtsuko Arita^{*,a} and Satoko Ishikawa^b^aKitasato University School of Pharmacy; 5-9-1 Shirokane, Minato-ku, Tokyo 108-8641, Japan; and^bKeio University Faculty of Pharmacy; 1-5-30 Shibakoen, Minato-ku, Tokyo 105-8512, Japan.

日本の薬学は「基礎薬学」からスタートしたといわれ、薬学教育においても化学物質としての薬物に関する学習が中心であった。平成4年、医療法に薬剤師が「医療の担い手」として初めて明記され、平成9年には薬剤師法が改正され、患者及びその看護にあたる者に調剤した薬の適性使用に必要な情報を提供することが義務付けられた。¹⁾ それまでの薬剤師は物質である薬を間違いなく調剤することが業務の中心であったが、その薬を正しく使えるように患者や家族の不安を受け止め、分かり易く伝えることも重要な任務になった。つまり薬剤師に期待される役割は“モノ”相手から“ヒト”相手へと変化してきたのである。

このような社会情勢の変化は薬学教育のあり方にも大きな影響をあたえ、平成14年8月には日本薬学会から「薬学教育モデル・コアカリキュラム」²⁾が出され、平成18年4月から6年制薬学教育がスタートした。実務実習に出るためには computer-based testing (CBT) や objective structured clinical examination (OSCE) に合格することが必須となり、薬学教育において“知識”、“技能”に加えて“態度”の重要性が強調されるようになった。6年制への移行がひと段落した平成25年12月には「薬学教育モデル・コアカリキュラム (平成25年改訂版)」³⁾が出され、平成27年度入学生からは改訂版に準拠した新カリキュラムによる教育が各大学で開

始されている。

全国の薬系大学の教育カリキュラムが、「基礎薬学」中心から「基礎薬学+臨床薬学」、そして「基礎薬学+臨床薬学+ヒューマニティ教育」へと大きく変化していく中で、改めて薬学領域における「教育」のあり方に目が向けられ、4年制教育課程においても参照基準が策定中のほか、臨床現場における教育や生涯教育プログラム等の構築も進められている。このように薬学領域において「教育」の重要性が謳われるようになると、教育手法や評価方法、教育成果の検討など、教育の質向上のために「薬学教育学」の確立を目指した議論が始まった。医療系領域における教育学に関しては、既に医学、歯学、看護学などでは確立されており、薬学においても相応しいあり方を検討していく必要がある。

そこでわれわれは、これからの「薬学教育学」の方向性や可能性について議論を深めていくために、日本薬学会第136年会にてシンポジウム59「『薬学教育学』のスタートアップ ～何をどのように見て、何を明らかにするのか」を企画・開催した。シンポジウムでは、これまでの「薬学教育学」の確立を目指した取り組みや今後の展望を紹介し、「薬学教育学」が取り扱う領域であるヒューマニティ教育、基礎薬学教育、臨床薬学教育などの現状や課題について話題提供した。また、医療系教育の先達である医学教育を実践する立場から、医学教育の変遷を踏まえて、薬学教育の未来に向けた提言を頂いた。

本稿以下4編の総説は、日本薬学会第136年会シンポジウムS59で発表した内容を中心に、各演者が誌上シンポジウムとして記述したものである。

はじめに昭和大学薬学部の中村は、「『薬学教育学』

^a北里大学薬学部(〒108-8641 東京都港区白金5-9-1),

^b慶應義塾大学薬学部 (〒105-8512 東京都港区芝公園1-5-30)

*e-mail: aritae@pharm.kitasato-u.ac.jp

日本薬学会第136年会シンポジウムS59序文

が目指すもの」と題し、なぜ薬学の分野に「薬学教育学」が必要となってきたかを歴史的な背景、科学的なアプローチの方法、薬剤師に求められる基本的資質等を踏まえて概説し、これまでの「薬学教育学」の確立を目指した取り組みを紹介している。その中でも特に、教育の本質として「教育者が何を教えたか」ではなく、「学習者が何を学んだか」が重要であり、そのためには科学的根拠に基づいた薬学教育が必要であることを強調している。

次に、慶應義塾大学薬学部の石川は、「ヒューマニティ教育の現状と課題」と題し、薬学教育におけるヒューマニティ教育の位置づけや目指す方向性について述べた。この中では、薬学教育協議会のヒューマニティ・コミュニケーション教科担当教員会議が全国薬系大学を対象として行った各大学のカリキュラム、授業内容に関するアンケート結果を基に、現状や課題について話題提供を行っている。特にヒューマニティ関連科目では即時的な教育評価が難しい一方で社会からのニーズに合わせ迅速な内容の充実も求められる点を指摘し、教員自身の努力と熱意の重要性に言及している。

摂南大学薬学部の安原は「基礎薬学教育の現状と課題」と題し、基礎科学者養成が主目的であった日本の薬学教育の歴史を概観し、改めて「臨床に係る実践的な能力」を志向した6年制薬学における基礎薬学教育の立場から現状や課題について話題提供している。薬学教育の問題を解決していくために、集

団を対象とした総論の教育と個人を対象とした各論の教育を適切に使い分ける必要性について述べ、経験主義に終わらずエビデンスに基づいた薬学教育を実践するため「薬学教育学」の使命について提言している。

最後に北里大学医学部の守屋は、医療系教育の先達である医学教育の変遷や教育理論を踏まえて、高等教育における教育者に求められる5つの能力を兼ね備えた教育専門家、特に薬学教育におけるヒューマニティ教育など、カリキュラム立案も評価も困難なテーマを含む医療人教育における専門家養成の必要性など、薬学教育の未来に向けた提言を行っている。

本シンポジウムが「薬学教育学」に関する情報共有となり、さらにすべての薬学教育関係者にとって今後の活動への指針となることを期待している。

REFERENCES

- 1) Nishira T., *Journal of the Toyaku*, **20**(5), 2 (1998).
- 2) Pharmaceutical Society of Japan, “Model Core Curriculum for Pharmaceutical Education,” 2002.
- 3) Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, “Model Core Curriculum for Pharmaceutical Education, revised edition,” 2013.